

首里王府の農政と原勝負

儀 間 淳 一

はじめに

17世紀、特に向象賢（羽地朝秀）が摂政職に就任した1666（康熙5）年以降、首里王府（以下王府と記す）はさまざまな改革に取り組んだ。その一つとして実施されたのが農村の指導監督及び生産基盤の整備であった。1669（康熙8）年に高奉行を設置し、それまで算用奉行が担当していた農務の監督を含む諸知行の管理、唐船（進貢船や接貢船）の貨物の管理を分担した^{*1}。その後、1697（康熙36）年には「法式」（「諸間切法式帳」）を布達し、地方の冠婚葬祭や農業、行政について指導している。18世紀に入り蔡温（具志頭親方文若）が三司官に就任すると、1734年（雍正12）年に「農務帳」を布達し、以後農業政策の基本となった。さらに1766（乾隆31）年には田地奉行を設置して、農地や耕作の管理・指導など農政全般を管轄させた。

このような状況のなかで考え出されたのが原勝負（または原山勝負ともいう。以下原勝負と記す）であった。原勝負とは、間切内の各村対抗で田畑の手入れや作物の出来不出来などを競わせる農事奨励策のことで、19世紀の初め頃に始まり、戦後の一時期まで各市町村で行われたといわれている。

原勝負については、仲吉朝助が1892（明治25）年に島尻郡の各間切に原勝負に関する内法や慣行等を報告させたのを『琉球産業制度資料』^{*2}に収録したものが、現在では原勝負を知る貴重な手がかりの一つとなっている。真境名安興はそれまでの原勝負の起源について問題提起しており、^{*3}比嘉春潮は、具志川間切の下知役が実施した間切の振興策と近代の原勝負との共通性について指摘している^{*4}。また、国立国会図書館支部上野図書館『琉球文献目録稿』編（1952年）によると元沖縄県技師の島原重夫が1918（大正7）年に「琉球原勝負考」という論文を発表しているが、その所在は不明である。^{*5}

他方、奥野彦六郎は^{*6}、原勝負を体系的に捉え、社会の成熟とともに「労働推進」方法も変化し、その結果、原勝負が考案されたと考え、その変遷過程を浮き彫りにした。また間切内法に原勝負に関する事項が多いことから、内法の形成にも大きく関わっていると考察した。しかし、19世紀初頭に考案されて以後、各地で原勝負が行われたとされているが、この時期の原勝負に関する史料が少なく、導入過程なども明らかにされていない。奥野の研究以降、新たな史・資料が発見・公開され、その中にはわずかではあるが原勝負に関する記述もみられる。本稿では、原勝負を通して首里王府の農政について考えていくことにしたい。

1. 旧慣調査資料にみる原勝負

原勝負とは間切内の各村で田畑の手入れや作物の出来具合などを競わせる農事奨励策であることは先述したが、その内容について1884（明治17）年の『沖縄島恩納間切取調書』^{※7}には、次のように記されている。

農事の勤惰を点検することは惣耕作当の重要な職務であるから、絶えず指示してきたが、行き届かない者がおれば、担当の役人らが協議して取り締まった。春秋五月と十月の年に二回の田畑勝負に夫地頭・掟・耕作当らが、手分けして間切の東・西を巡廻して、荒地や放置された土地、または農作物の出来具合、除草が不十分な所は夫地頭・掟が速やかに書き留め、科定に従って違反した者一人ひとりに科銭^{かせん}を申し付けた。また、その村の夫地頭・掟にも指示が行き届いていないとして科銭を申し付けた。その結果は、春秋の「御廻勤」の時に田地奉行に報告した。原勝負の日に徴集した科銭で酒を買い、担当の役人・夫地頭・掟・耕作当らへ分配した。

そして、田地方の春秋の廻勤の時には、各村の地組頭・耕作当・掟・夫地頭を呼び出し、「耕作行届キタル村」いわゆる「勝方」の者を上席に座らせ、「不行届ノ村」（負方）の者を下席に座わらせ、上席の者に向って拝伏させた。その時、役人が「今年ハ其時怠惰ニ依リテ下席ノ恥ヲ受ケタルナレバ、来年ヨリ勉強シテ他村ニ負勿レト戒メ」た後、解散させた。なお、勝った村に褒美等はなかった。

また、秋の収穫期には作物の出来不出来を競わせた。作物が熟する頃に地頭代をはじめ、惣耕作当・各村の夫地頭・掟・耕作当が各村の田畑を見廻った。その結果は田地奉行に報告した。

田畑巡廻の後には、「屋敷勝負トテ屋敷ノ回見」を行い、「若シ払除不行届ノモノアレハ勝負ノ負方」となった。

原勝負は廃藩置県後も継続して行われ、1899（明治32）年に県が「原勝負山勝負賞与規程」を設けると^{※8}、全県的に行われるようになった。その後、戦後は産業共進会という名称で1960年代まで行われた。

2. 田地奉行の春秋廻勤と原勝負

王府は、高奉行の管轄であった農政全般を1766（乾隆31）年に設置した田地奉行に担当させた。その理由は、石高と土地制度に関することや諸間切の農政指導に加えて、「唐船出入」の管理や琉球・鹿児島間を往来する「楷船」に関することなど、高所の所管すべきことが多く、農政を兼務させるのは無理だと考えていたからである^{※9}。田地奉行が引き継いだおもな職務は次のとおり^{※10}であったが、これらの一部は高奉行も兼務した。

- ①田畑農作物の状況報告
- ②棕櫚・黒つぐ・柴木・櫨・桐・唐竹等の植栽及び成績報告
- ③開墾地の測量及び侵墾等の処理
- ④災害地の免租及び賦課更正

⑤河川橋梁道路等の修理

⑥牧場の管理

⑦備荒貯蓄

王府は、島尻・中頭・国頭の3地方にそれぞれ田地奉行を配置して上記の職務を遂行させたが、このほかに高奉行から引き継いだ職務として奉行による地方巡検があった。高奉行は毎年春と秋の二回、担当地方の各間切を巡検して農村の指導・監督にあたっていたのである。史料ではこの巡検のことを「廻勤」あるいは「春秋両度之御廻勤」などと記されている（以下、廻勤と記す）。その内容は、『田地奉行規模帳』のなかに次のように記されている。

一耕作跡見之儀、前廉夫々之仕口首尾書差出させ、出立之日柄相究候はゞ、御構之御物奉行御取次御案内申上、廻勤相仕舞罷登候節、下知方之次第一帳に相総、首尾申上候事。

附、跡々は春秋罷通候処、乾隆四十一丙申年一度之見分は一節検者請込被仰付候、右に付田地方通勤之時節吟味被仰渡、段々試之上秋通勤ニ相片付申上、同四十四己亥年より春之下知方は、首尾書迄を差出させ、差引承届候事。

一農事下知方之儀、雍正十二甲寅年被仰渡置候農務帳表、其外万端気を付、地面見届致下知余并に替り手入仕付方宜者は、直面に褒美申聞、何れその手本に可申渡候、抜群抽相働候者は、吟味之上申出次第御褒美被仰付候事。

一田畠荒置其外諸法儀相背候者は、則々軽重吟味の上科鞭申付候事。

（附、以下省略）

この春秋の廻勤は高所設置以来毎年行われてきた。高奉行が廻勤する時には間切の捌理が随行していたが、1776（乾隆41）年から年に一度は検者が引き受け、1779（乾隆44）年からは春の廻勤のさいは報告書を提出するだけでよいということになった。田地奉行は所轄の各間切を廻り、『農務帳』に書かれている通り、万事気をつけ、土地の状態を見届け、作物の植え付けや手入がよい者は直々に褒美を与え、特に優れた者は吟味の上褒賞された。これに対し、田畑の手入れが行き届いていない者やその他の違反者には科鞭を申し付けた。また、この条文の「附」には、赤八卷以上の者には科鞭の代わりに科銭を申し付けることや、これを監督する検者、下知役も処罰する旨のことが記されている^{*11}。

奥野は「すでに巡視と賞罰とが結びついている。そして右田地奉行規模帳が整備・制定されてから間もなく、ムラムラ間に競争的に以上のことをさせて賞罰するいわゆる原勝負の方法が発生したようである」^{*12}と、田地奉行の廻勤が原勝負考案の前提となったと指摘している。

3. 原勝負の考案

原勝負の起源は明らかでないが、豊見城間切の地頭代を務めた座安親雲上が間切に利益をもたらし、王府から表彰されたのが最初といわれている。『球陽』巻二十尚瀬王十一年

(1814)の条の「豊見城郡高安村の前の座安親雲上の善行を褒奨す」というのが、その時の記事である。これによると、座安親雲上が六歳の時、父は根差部掟として在職中に私的な債務のことで罪に問われ、流刑に処せられた。そのため従伯父（父の従兄弟）に養育され成人した。養父の恩に感謝し、すべて養父の言いつけに従い孝養を尽くした。そこへ実の父が流刑地で住民に蘇鉄の製法を教えた功績によって赦免されて戻ってきた。

その後、実の父母と養父母とともに暮らし、毎日の夕食は双方の親の望む物を調べ、外出や帰宅の際には必ず親に挨拶を行った。それは急用の時でも欠かすことはなかった。親の死後も位牌を安置して祀り、生前と変わらずに尊び敬った。

親戚縁者との付き合いも睦まじく、困窮者には住家と耕地を与えたり、米や金を施した。貧しくて葬式もできない者には座安自ら費用を出したり、自分が出すことができない場合は他家から借りてこれに充てた。

また、公務も怠ることなく、地頭代を二度も務めた。その時に間切中をよく指導したので、その効果が現れ大きな利益があるとたたえられて「篤行可嘉」の掛床と綿子三把、上布三疋を賜ったという^{※13}。

これについて、真境名安興は『沖縄一千年史』のなかで次のように述べている。

原勝負の起源は文化十一年政庁より善行を表彰せられたる豊見城間切前地頭代座安親雲上より始まれりと云ふ説あるも未だ詳ならず。球陽卷二十に「且つ勤むる所の公務敢て惰怠せず又兩次地頭代役に任し克く郡中を指揮す」等の文句あるも、原勝負の制を設けしことに言及せざればなり^{※14}

真境名は、原勝負の起原に関する従来の説に疑問を呈している。

また、京都大学所蔵の「琉球資料 156 諸書附集」^{※15}にも座安親雲上の褒書が収録されている。内容は『球陽』の記事よりも詳細で「父の蒙りたる汚名を雪がんとし、鞠窮努力諸事正道に励み、父の流刑赦免の後もその名誉を恢復すべく、父をして地頭代の地位に登らしめんと切望を抱いて」^{※16}父子ともども努力した。その結果、父親が夫地頭に任命されたこと、座安親雲上が初めて蘇鉄の種子を蒔いたこと、冠船渡来の際は那覇に詰めて滞りなく業務を遂行したことなどが記されている。これらの功績のうち「就中農業方別而入念、時々下知人壺人ツ、付置、毎年四月八月田畠耕方村分ケニ而為致勝負候故、我増励立作物取実格別ニ相増」と原勝負について特筆している。

『球陽』卷十七尚穆王四〇年（1791）の条には「豊見城郡我那覇村の前の地頭代座安親雲上の善行を褒奨して座敷位を賜ふ」という記事がある。我那覇村の座安親雲上が、かつて掟の時に平良・高嶺両村が衰亡し、「心を留め慮を発し、毎村、頭目一名を設建し、毎年、分米各一斗二升五合を捐貲し、之れをして善く教へしむ。爾かより以来、百姓漸く興り、諸凡の賦を投納して敢へて遅滞せざりき」という。このことが直接影響したかどうかは明らかでないが、高安村の座安親雲上も「就中農業方別而入念、時々下知人壺人ツ、付置」と、農業の振興に熱心で時には下知人を一人ずつ配置していたという。奥野がいうように田地方の廻勤が原勝負の前提であったにせよ、当時の豊見城間切は、原勝負が考案される

条件が整っていたのであろう。

このことについて奥野も「社会の推移上、旧来の強制割当法式だけではどうにもならなくなる一方、いよいよ勤労促進の必要に迫られた期に及んで、競争的法式が採入れられたのであろう。先ず中心地近辺からこの方法が発してのも偶然ではなかつた」と肯定している。

しかし、仲吉朝助が1892（明治25）年に島尻郡各間切へ出した原勝負に関する問い合わせに南風原間切は「原勝負に関する賞罰、其外勝負を決定する標準并之れに関する諸例規等取調候処、別紙罰則のみ有之」と回答し、田畑の手入れや印部土手などの管理、屋敷内外の掃除を怠った場合には科金を申し付ける、といった内容の文書を提出している。そして、その末尾には次のように記されている。

右間切中諸仕立付勝負之儀、此節より仕不足之所はヶ条之通り科金相定置候間、毎家内無手拔仕調候様人別可申渡置候、此段兼而致問合候、以上。

附、掟頭耕作当は仕不足之輕重吟味之上、其科申付候事。

巳年正月（乾隆三十八年）※¹⁷

この時期にはまだ原勝負という名称がなかったのか、あるいは公的に用いられていなかったのか「諸仕立付勝負」と記されている。また、「右間切中諸仕立付勝負之儀、此節より仕不足之所は云々」という文脈から、科金を申し付けることが定められた1773（乾隆38）年以前から農事に関する勝負が行われていたことになる。ただし、これが王府の指導によって行われたのか、間切独自に行ったのかは不明である。

また、前記の仲吉の問い合わせに知念間切も南風原とほぼ同様の文書を提出している。知念間切の場合、科金の単位が円・金となっており、日付も記されていないが、条文の内容や末尾に「但掟及耕作当は、仕不足の輕重に依り吟味の上其科申付候事。」※¹⁸とあることなどから南風原間切と同時期の文書と思われる。

奥野は、南風原間切の上記の文書について「乾隆三十八年では前示^{かりたて}驅立促進方式が同間切等に達せられてから五年目であって、当時それほど急変があったのは疑わしい」※¹⁹と注記している。南風原間切は1768（乾隆33）年の「耕作働方締方帳」の中で、エイ組の作業を休んだり遅刻した者には科鞭、あるいは科金を申し付ける「驅立式勤労促進方法」を採用しているのにもかかわらず、この5年後には前記のような「集団間競争的勤労方式」へ変更することは疑わしい、というのである。

4. 原勝負の実施

①東風平間切の事例

『毛姓家譜』（上里家）によると14世の上里親雲上盛詳は1835（道光15）年に東風平間切の下知役に任命されている。東風平間切は18世紀半ばごろから疲弊の兆候があらわれ、1800年（嘉慶5）に下知役が派遣され、約5年後に復興のめどがつき下知役をひきあげた。

しかし、その後再び疲弊し、この時に下知役として派遣されたのが上里親雲上であった※²⁰。上里はそれから約15年かけて間切を建て直し、その功績により1851年（咸豐元）に王府か

ら褒賞された。褒状にはその功績の一つとして「役々百姓中熟談を以村々地割無親疎致配当、田畠諸仕付諸上木仕立方加下知候上、春秋二者諸作毛耕方勝負させ候故、百姓共気力を起耕作方無油断相励年貢諸上納物諸知行作得等渥々相納」^{※21}と記されている。土地を公平に配分し、作物の植え付けや諸上木の栽培法について指導し、春と秋に競わせたことから、百姓達は耕作に励み年貢や諸上納物、知行作得まできちんと納めるようになったという。

王府から派遣された下知役によって原勝負が行われた事例である。隣接する南風原間切や豊見城間切では、すでに原勝負やこれに類似する勝負が行われていたが、東風平間切で行われたのは、南風原間切より約50年後、豊見城間切でも10数年後のことであった。

しかし、東風平間切はまたしても疲弊し、1859（咸豊9）年に下知役の派遣を願い出ている^{※22}。

②久米島の事例

毛姓13世の嵩原里之子親雲上安寛が高所筆者の時、疲弊した久米島両間切を指導するため1855（咸豊5）年8月に現地に赴き、年貢・上納物・所遣等の公平な賦課、村柄に応じた地割等を行った。そして「百姓等農務諸仕付方村分人数分ヲ以勝劣申付候故、以前ニ替格別属之体相見得候付、以後右通勝劣ニ而引厲首尾申越候様申渡」して、翌年帰帆している^{※23}。

しかし、嵩原里之子親雲上が帰帆した翌1857（咸豊7）年には再び取納座大屋子の松山里之子親雲上と高所筆者の松川里之子親雲上が派遣されている。途中、病気のため帰帆した松川の代わりに派遣された比嘉筑登之親雲上賀張が「農業仕付方之儀、村々式手差分日限立を以勝負為致、原々走廻現直差引、面々働之善悪応し則々賞罰相行且百姓共原出遅有之候付、時刻定を以科定をも相立、毎日未明原江罷出働方又者役々共下知方之次第等証文差出させ」厳しく監督したという^{※24}。

嵩原里之子親雲上は帰帆する際「以後右通勝劣ニ而引厲首尾申越候様申渡」したにもかかわらず、それが続けられなかったのである。ちなみに明治期の久米島両間切の内法には原勝負に関する事項は記載されていない。

③南風原間切の事例

1859年の「咸豊九年（安政六年）己未南風原間切惣耕作当日記」には、田の草取りを怠たるなど田畑の管理が不十分な者やその村の耕作当などに対する処分が記されている。そのなかに南風原間切の津嘉山村が春秋の廻勤の際、田地方の役人が見廻りに来る日までに道路を掃除していなかったため、同村の耕作当2人と同村を担当していた津嘉山掟が咎められ、前者には科銭10貫文ずつ、後者には科銭5貫文を申し付けている。

（前略）

一科銭拾貫文宛

津嘉山村耕作当二人

但春秋両度之御廻勤之儀、兼々諸仕付村内諸勝負いたし、御頭役御始惣御廻日限御差越候迄、道々諸掃除等不致候不届に付。

一同五貫文

津嘉山掟 大城にや

但右同兼而申渡置候通、諸事可致下知方之处、其儀汲請無之不屈に付。

右者田地御奉行より御咎目被仰置候处、段々御断^{オコトワケ}ケに付、間切内法取行何分之首尾申上候様被仰渡候に付、頭役始役々中吟味之上、腰書之通科錢召行置候間、来月朔日出勤耕作当にて当所へ相納候様可被申渡候、以上。^{※25}

未三月二十七日

惣耕作当

惣山当

同史料の末尾には、これらの者（前略部分の者も含む）は田地奉行から叱責されたところ、いろいろと弁解したので、間切内法によって処分し、その結果を報告するよう申し渡されたので、頭役はじめ役々が吟味のうえ科錢を申し付けた、と記されている。1768（乾隆33）年に原勝負に関する条文が布達されてはいたものの、同間切で毎年勝負が行われたり、科錢を申し付けていたのかは不明である。

④美里間切の事例

検者として美里間切に派遣された渡口里之子親雲上眞全は、農事を奨励して間切を建て直し、1875（光緒元）年に褒賞された。その褒状には「原勝劣仕分^{はらしょうれつ}ケ之儀、前々者劣之方巾拔勝^{きん}之方江致一礼候迄ニ而左程恥辱ニ存候体不相見^{あいみえず}得候付、劣之方者巾拔勝^{トガブチ}之方江一礼させ候上仕不足多相立候村頭并耕作当共科策取行、勝之方者褒美与して焼酎相与引進候付一統励立諸仕付向以前ニ替格別宜相成」^{※26}とある。

前記①から③までの事例では原勝負という名称もなかったが、この頃の美里間切では、「原勝劣」という語が用いられている。また、「勝之方」（勝者）が「劣之方」（敗者）に一礼させるだけでは反省を促すことができなかった。そこで渡口里之子親雲上が負けた方に一礼させるほか、その村の頭や耕作当は科策（鞭打ち）を行い、勝った方には酒を与えることにしたところ「以前ニ替格別宜相成」ったという。

褒状の文中に「巾」とあるのは手ぬぐいのことと思われる。戦前まで原勝負の表彰式には字の役員が頭に手ぬぐいを巻いて出席し、負けた方はこれを取って勝った方に一礼したという話を近代の新聞や聞き取りでも確認できる。

美里間切の原勝負が廃藩置県以降、各地で行われてきた原勝負とほぼ同内容であることから、原勝負という名称やその内容が定着しはじめたのは、渡口里之子親雲上が派遣された1872（同治11）年前後、あるいは早くても1860年代のことと考えられる。

むすび

これまで豊見城間切高安村の座安親雲上の褒状が原勝負に関する最も古い史料であるといわれ、座安親雲上が原勝負を考案したともいわれてきた。

しかし、奥野彦六郎が指摘したように、高奉行や田地奉行の廻勤が原勝負の前提になっていたことは明らかである。また、前記の奥野の見解とは異なるが、1773（乾隆38）年の

南風原間切の文書から座安親雲上の褒賞よりも早い時期から原勝負が行われていた可能性が高い。

いずれにしても、原勝負が各間切で行われるようになったのは19世紀以降のことで、前記の座安親雲上のような間切役人であったり、検者や下知役など王府の役人によって疲弊した間切を建て直す手段として実施された。また、美里間切の事例から近代以降の史料にみられるような原勝負が定着したのは、1870年前後か、早くても1860年代のことと思われる。それは農事奨励や間切の再建にある程度の効果をあげた。

しかし、東風平間切のような慢性的な疲弊を解消するには至らなかった。役人や百姓の努力だけでは解決できないさまざまな問題を当時の農村は抱えていたと考えられるが、これについては次の機会に検討することにしたい。

-
- ※ 1 『球陽』 卷七尚貞王元年（1669）の条。
 - ※ 2 小野武夫編 『近世地方経済史料』 第九巻 吉川弘文館 1958年
 - ※ 3 真境名安興「沖縄一千年史」『真境名安興全集』 第一巻 琉球新報社 1993年 354～355頁・「沖縄現代史」前掲『真境名安興全集』 第二巻 179～180頁
 - ※ 4 比嘉春潮『比嘉春潮全集』 第二巻 沖縄タイムス社 1971年 135頁
 - ※ 5 国立国会図書館支部上野図書館『琉球文献目録稿』 編（1952年）によると元沖縄県技師の島原重夫が1918（大正7）年に「琉球原勝負考」という論文を発表しているが、その所在は不明である。『月刊琉球』 第八号（1938年）にその論文が引用されている。『帝国農会報』 第19巻第6号（1929年）で渡辺保治が「琉球紀行」という紀行文で原山勝負のことを紹介しているが、前記の『月刊琉球』の引用文と同じ箇所がみられることから、渡辺の紀行文も島原の論文の引用と思われる。
 - ※ 6 奥野彦六郎 『南島の原山勝負制の構成—南島労働推進史—』 農林省農業総合研究所1955年
 - ※ 7 東京大学史料編纂所蔵「沖縄島恩納間切取調書 旧慣問答第三冊」『沖縄島国頭地方旧慣問答書』 明治17（1884）年
 - ※ 8 県令第20号（明治32年3月30日）『明治三十九年度沖縄県令達類纂』
 - ※ 9 前掲『近世地方経済史料』 第九巻 62頁
 - ※ 10 前掲『真境名安興全集』 第一巻 350頁
 - ※ 11 田地奉行の廻勤、もしくはこれに関わるとされる伝承が豊見城市には残っている。同市字高嶺には、王府時代に役人が田畑の作付状況等を検分したという「ハルマーイヌチジ」（原廻りの頂）と呼ばれる丘があった。
 - ※ 12 前掲『南島原山勝負制の構成—南島労働推進史—』 54頁
 - ※ 13 島尻郡教育部会編『島尻郡誌』 島尻郡教育部会 1937年551頁には、掛床について「球陽には題字を篤行可喜とせるも、同家掛額には善行可嘉と記せる由、今屋号新垣

小といふ」と註記されている。

- ※14 前掲『真境名安興全集』第一巻 355頁
- ※15 那覇市企画部文化振興課編『那覇市史』資料篇第1巻11 琉球資料（下）那覇市役所
1991年 582～583頁
- ※16 平木桂「琉球の原勝負」『歴史と生活』第4号 慶應義塾経済史学会 1938年 149頁
- ※17 前掲『近世地方経済史料』第九巻 127～128頁
- ※18 前掲『近世地方経済史料』第九巻 121頁
- ※19 前掲『南島の原山勝負制の構成—南島労働推進史—』 54頁
- ※20 金城正篤・上原兼善・秋山勝・仲地哲夫・大城将保『沖縄県の百年 県民百年史47』
山川出版 2005年 18～19頁
- ※21 那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』資料篇第一巻七 家譜資料（三）首里系 那
覇市役所 1982年 707頁
- ※22 前掲『沖縄県の百年 県民百年史47』 20頁
- ※23 前掲『那覇市史』資料篇第一巻七 家譜資料（三）首里系 830頁
- ※24 那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』資料篇第一巻八 家譜資料（四）那覇・泊
系 那覇市役所 1983年 327頁
- ※25 前掲『近世地方経済史料』第九巻74頁
- ※26 前掲『那覇市史』資料篇第一巻七 家譜資料（三）首里系 674頁